

認識と価値形成

——企業と人間の進化の問題の基礎——

(六)

笠原俊彦

(3) 狭義の価値における生存基準の意味

われわれは、対象観念に対する事実に対応するような基礎を、狭義の価値の優劣の判断については見出すことができない。だが、このことは、われわれ人間のうちに、狭義の価値について優劣を感じるという事実が存在することを否定するものではない。われわれは、この事実をけっして無視してはならない。

人間のうちには、生存に密接に関わる対象観念について、狭義の価値を形成する一つの性質がある。この性質は、たしかに、必ずしも意識されているわけではない。そして、人間の価値形成は、この性質のみによって説明されうるわけではけっしてない。人間の価値形成は、むしろ、一般的には、Popperのいう問題解決として理解されるべきものであるかもしれない。しかし、それにもかかわらず、われわれは、人間のうちに、生存、さらには、より良い生存に関わる対象観念について、狭義の価値を形成する一つの性質があることを否定することができない。人間のさまざまな利害は、そこに形成される一つの広義の価値、より良い生存という広義の価値、を核心として発展したものであるとさえ、われわれは、いうことが可能であろう。

しかも、このような利害について、われわれは、人間のうちに、優劣の感情が形成されることを知っている。われわれは、私的利害、そしてこの要素としての狭義の価値よりも、公的利害、そしてこの要素としての狭義の価値が、高

位にある、と感じる。おそらく、ひとは、程度の差はあれ、狭義の価値についてのこのような感情を免れることができない。すでに述べたように、この感情は、われわれのうちに、つねに顕現するわけではないが、しかし、それは、われわれのうちに一般的に存在する、ということができようであろう。

わたくしには、われわれ人間のうちにあるこの感情こそ、前述した客観的価値の理論を生み出した主要因である、と思われる。そして、ひとは、しばしば、人間が、この高位の狭義の価値をもつがゆえに、他の有機体に比べて優れている、と考えるのである。

もっとも、この場合、われわれは、人間以外の動物が、このような高位の価値を有しない、と考えてはならない。このような高位の価値は、むしろ、人間以外の動物のいくつかの種に、人間よりも徹底した形でさえ存在する。このような動物種として、われわれは直ちに、いくつかの蟻や蜜蜂をあげることができるであろう。

公的利害、そしてその要素としての狭義の価値が、私的利害、そしてその要素としての狭義の価値よりも優れているという感情は、わたくしにも存在する。この感情が、少なくとも、わたくしの行動を規定する有力な要因の一つであることを、わたくしは認めなければならない。

そして、わたくしには、公的利害は、結局のところ、種としての人間のより良い生存に帰着するように思われる。われわれは、これを、種としての人間の福祉とよぶこともできるであろう。それは、公的利害のなかで、わたくしが考えうる限り最も高い位階をもつ広義の価値である。そして、それは、わたくしには、人間のあらゆる行為の優劣を判断するための基礎として最も適切である、と思われる。

人間の認識は、もちろん科学的認識をも含めて、いうまでもなく、人間の行為の一つである。それゆえに、それは、人間にとって意味をもつ。それは、人間を離れた独自の意味をもつわけでは、けっしてない。そして、人間の行為の人間にとっての意味とは、結局は、種としての人間のより良い生存への役立ち

以外にはない、とわたくしには思われる。

この場合、われわれは、このように人間の行為を意味づける、種としての人間のより良い生存という価値が、一つの広義の価値であり、したがって、すでに述べたように、その構成要素としての狭義の価値によって、価値として成立するものであることに、留意しなければならない。

このように、認識が種としての人間のより良い生存という広義の価値によって意味づけられ、しかも、この広義の価値が、この要素としての狭義の価値によって価値として成立する、と考えるとき、わたくしには、人間にとって、この狭義の価値こそが、科学的認識を含めて、人間の認識を規制するべきものであることが示唆されているように思われるのである。

だが、それだけではない。われわれは、ここで、人間の認識のみならず、その価値形成も、また、人間の行為の一つであることを想起しなければならない。わたくしには、人間のさまざまな利害の形成のみならず、これを含むさまざまな広義の価値の形成が、そして、これらの広義の価値の要素としての狭義の価値の形成が、人間の生存によって可能となるものであり、この意味において、人間の生存を基礎とするだけでなく、そもそも、それらは、人間の生存を構成する人間的行為の一部であって、それゆえにこそ、それらは、人間にとって意味をもち、人間を離れた独自の意味をもつものではない、と思われる。そして、この場合、わたくしには、人間にとっての意味とは、種としての人間のより良い生存以外には、考えられないのである。

以上のことが、わたくしに、わたくしの研究の価値前提として、種としての人間のより良い生存という広義の価値を措定させるのみならず、また、この広義の価値の要素としての狭義の価値を、さまざまな狭義の価値の優劣を判断するための基礎として措定させる理由であることは、いうまでもない。

この狭義の価値は、さまざまな対象観念の優劣を判定するための基礎としての事実と同様の意味で、さまざまな狭義の価値を判定するための基礎となりうるものでは、もちろん、ない。種としての人間のより良い生存という広義の価

値の要素としての狭義の価値は、さまざまな他の狭義の価値と別個に与えられているものとして想定されうるものではないからである。それは、われわれが形成するさまざまな狭義の価値の一つであるにすぎない。

たしかに、研究者としてのわたくしは、われわれのうちに、公的利害の要素としての狭義の価値が私的利害の要素としての狭義の価値よりも優れているという感情があることを指摘することができる。だが、わたくしは、人間のうちには、このような感情とともに、公的利害の犠牲において私的利害を追求しようとする一つの性質が存在することを認めなければならない。人間には、公的利害が私的利害よりも優れていると考え、公的利害のために私的利害を犠牲にする一つの性質が存在するとともに、逆に、私的利害のために公的利害を犠牲にする一つの性質が存在する。

そして、この場合、研究者としてのわたくしは、このような相反する性質が存在することの指摘を超えて、どちらが正しいと主張することはできず、したがって、どちらがあるべきだと主張することもできない。このような主張は、価値判断ないし価値形成の表明であり、価値判断ないし価値形成としてのみなされうるからである。

このようにして、わたくしは、わたくしが自らの研究の価値前提とした人間のより良い生存という公的利害の正しさを証明することができない。このようにその正しさを証明できないからこそ、わたくしは、それを、わたくしの責任において選択し、わたくしの研究の価値前提とするのである。

社会科学的研究のみならず、おそらく、すべての研究が、何らかの価値に関連しており、研究者が意識しているか否かにかかわらず、何らかの価値にもとづいている。そして、研究者は、自らの研究がもとづいているその価値の正しさを証明することができない。このとき、このことを自覚し、自らがその研究の前提としている価値を明示するよう努めることは、真理を追究する科学者がとりうるせめてもの態度であろう。このことによって、研究者は、その研究がもとづいている価値が相対的であることを自ら確認するとともに、それにも

かかわらず自らがその価値をその研究の前提とせざるをえないことを、その理由とともに、明らかにすることができるのである。

(4) 狭義の価値と種の存続

人間のより良い生存という広義の価値を研究の価値前提とするとき、この広義の価値の要素としての狭義の価値について、われわれが留意すべきことがある。それは、この狭義の価値が、ある特殊な場合については、狭義の価値の優劣を判断するための基礎となるうること、これである。ここにいうある特殊な場合とは、人間がその種の存続に害をもたらしうるものごとを好む場合に他ならない。

わたくしは、これまで、人間のより良い生存という広義の価値を構成する狭義の価値が、狭義の価値の優劣を判断するための基礎となりうるためには、あまりにも曖昧であることを述べてきた。以下に述べる場合は、このことの例外をなすことが注意されなければならない。それは、おそらく、わたくしが、わたくしの価値前提から狭義の価値の優劣に関して発言しうる数少ない分野の一つである。

さて、人間がその種の存続に害をもたらしうるものごとを好む場合の例として、われわれは、麻薬に対する嗜好をあげることができるであろう。われわれは、また、これよりも害が顕著ではないものとして、タバコをあげることができる。これらのものは、少量であれば、たしかに、さほどの害をもたらさないかもしれない。だが、これらに対する好みは習慣化し易く、このことによって、その摂取は過度になり易い。さらに、われわれは、古来、われわれ人間のうちにみられる他の人間に対する攻撃をあげることができる。とりわけ、攻撃の集団的形態としての戦争は、今日では、種としての人間の滅亡を現実のものとして、われわれに感じさせるほどのものとなっている。

以上の例は、人間がじつに多様な対象観念について狭義の価値を形成し付与すること、すなわち人間の価値形成機構の機能の多様性を、ある面で示してい

る。それは、人間が、その生存に害のあるものごと、この対象観念、にまで狭義の価値を形成し付与することを示しているのである。価値形成機構の機能の多様性は、この意味においても、まさに、人間という有機体種にみられる特質の一つである。

このことは、人間の価値形成機構の機能の多様性が、人間の価値形成機構の機能の他の有機体種のそれに対する優位性を意味するものではないことをも、示している。人間がその生存に害を及ぼす内容をもつ対象観念についても狭義の価値を形成し付与するという意味での人間の価値形成機構の機能の多様性は、これを種としての人間の生存という観点からするならば、むしろ、人間の価値形成機構の機能が劣っていることの証拠であるときえいえるのである。

このように種としての人間の生存に害をもたらさうるものごとに対する好みについては、この好みすなわち狭義の価値について、種としての人間のより良い生存という広義の価値の要素としての狭義の価値を基礎として、その優劣を判定するための何らかの基準を構成することが可能であろう。種としての人間のより良い生存という広義の価値の要素としての狭義の価値は、さまざまな狭義の価値のすべてについてその優劣を判断する基礎としては、たしかに曖昧であるが、しかし、それは、種としての人間の生存を危うくしうるものごとに対する好みという狭義の価値について、これを劣ったものとして判断する基準を構成するための基礎とはなりうるのである。

それだけではない。それは、著しく限られた範囲においてではあるが、種としての人間の生存に害を与えるものごととの対[・]比において、種としての人間の生存に益を与えるものごとが明らかになるとき、これに対する狭義の価値を優れたものと判断する基準を構成するための基礎ともなることができるであろう。

以上のような基準を構成するためには、種としての人間の生存に害があるものごとと益があるものごとについての解明が、もちろん、必要である。この解明は、人間がその文明を発展させ、今日、とりわけその一つとしての企業を発

展させることによって、種としての人間の生存に重大な影響をもっておりまたもちうるさまざまなものごとを日々生み出し、しかもこの影響の多くがわれわれにとってほとんど未知であることを考えるとき、人間にとっての一つの重大な課題だといわれざるをえない。そして、その解明は、もちろん、科学的研究に課された最も重要な課題の一つである。

(5) 種、集団および個体としての人間の生存の非整合性

種としての人間のより良い生存という広義の価値について、そしてこの要素としての狭義の価値について、われわれが、さらに注意しなければならないことは、これらと、集団としての人間のより良い生存という広義の価値およびこの要素としての狭義の価値、個体としての人間のより良い生存という広義の価値およびこの要素としての狭義の価値が、相互に矛盾しうること、これである。

すでに述べたように、人間の諸集団は、それぞれに異なる狭義の価値を有しうる。例えば、食材や調理法について、ある集団と他の集団との間には、その好まない狭義の価値に相違がある。その際、ある集団が格別に好む食材や調理法が、他の集団に嫌悪を喚起する可能性があることは、われわれがすでに知っていることである。

また、人間は、個体によって、その好まない狭義の価値を異にしうる。例えば、ある個人は、クラシック音楽を好むが歌謡曲は嫌いだ、ということがあると、他の個人は、逆に、歌謡曲は好きだがクラシックは嫌いだ、ということがある。

だが、人間の狭義の価値は、このように諸集団間、諸個人間において異なりうるのみならず、個人と集団について、さらには、これらと種との三者についても異なりうるのであり、しかも矛盾しうるのである。このような相違と矛盾は、ときに、個人の生存、集団の生存、種の生存について生じうるのであり、このことは、ときに、特定の個人のうちに耐え難いほどの緊張と葛藤をもたらすことになる。

たしかに、より多くの個人のより良い生存が、概して、より大きな集団、より多くの集団のより良い生存を意味し、また、より大きな集団、より多くの集団のより良い生存が、概して、種としての人間のより良い生存を意味することからすれば、個人の狭義の価値、集団の狭義の価値、種としての人間の狭義の価値が、より良い生存という観点からみて、概して整合性をもちうることは否定されえない。

だが、事態は単純ではない。われわれは、特定の個人がその属する集団を犠牲にして、さらには種を犠牲にして、生き延びようとする場合があることを知っているし、また、逆に、特定の個人がその属する集団のために、ときには種としての人間のために自らを犠牲にしようとする場合があることをも知っている。われわれは、さらに、特定の集団が種としての人間を犠牲にして生き延びようとする場合があることを知っているし、また、稀にはあるが、種としての人間のために自らを犠牲にしようとする場合があることを知っている。これらの場合は、いずれも、個人の狭義の価値、集団の狭義の価値、種の狭義の価値が、それぞれのより良い生存という点からみて矛盾しうることを示しているのである。

個人、集団、そして種の間にもみられる狭義の価値のこのような矛盾は、積極的であれ消極的であれ、意識しつつ引き起こされることがある。だが、その多くは、むしろ、意識なくして生じ、思わざる効果として結実する。しかも、この場合、事態をより複雑にするのは、諸個人間または諸集団間のそれぞれにおける狭義の価値の矛盾のみならず、特定の個人、特定の集団、さらには、種としての人間の内部における狭義の価値の矛盾である。ここでは、とりわけ、個人、集団、種のそれぞれの利益の名において、それぞれを害する狭義の価値が形成され、保持されることが注意されなければならない。なかでも、集団については、その特定の構成員のみに利益をもたらす、集団にとってはむしろ害をもたらす狭義の価値が、集団の利益の名において形成され保持されうことは、われわれが歴史から手ひどく学んでいることである。

個人、集団、種のそれぞれにおいて、その相互間における、そしてその特定のものの内部における狭義の価値の矛盾の解決は、一つには、すでに述べた合理的統合化によってなされうる。そして、個人、集団、種のそれぞれにおける合理的統合化は、また、個人、集団、種の間における狭義の価値の矛盾をある程度解消しうるであろう。それぞれの合理的統合化が、すでに述べた道徳的位階の観念を価値前提としてなされるときには、とりわけ、そうである。もっとも、これらの矛盾は、道徳的位階の観念を価値前提とする合理的統合化によっても、完全に解消されてしまうわけでは、けっしてない。なぜなら、個人、集団、種のそれぞれ、そしてそれらの間には、合理的統合化によっても解消されない、いわば論理必然的矛盾が存在するようにみえるからである。われわれは、また、力による支配が合理的統合化を妨げうることをも、忘れてはならない。

個人、集団および種の三者について狭義の価値が矛盾しうる時、われわれは、種としての人間のより良い生存という価値前提の適用において慎重でなければならない。われわれは、一方において、上記三者の矛盾のいかんを解明しなければならない。この解明は、それぞれの狭義の価値が結びつく対象観念の内容とこの関係の解明を必要とするであろう。この解明は、三者の間の偽の矛盾を明らかにし、このことによって、三者の間の矛盾とみえるものを減少させるかもしれない。しかし、この解明によっても上記三者の矛盾が解消されないとき、われわれは、困難に直面することになる。このとき、われわれは、一人の人間としての全存在を賭けた決断を迫られることになるかもしれない。

(6) 定向的相対性

種的相対性およびこれに関連する事項についての以上の論述は、人間の狭義の価値および価値形成機構が、対象観念および認識機構の場合と同様に、全体として優れたものへと発展しているとはいわれえないことを明らかにするであろう。有機体の狭義の価値および価値形成機構は、これまで変化してきており、

また、これからも変化すると思われるのであるが、この変化は、これを人間という特定の有機体種についてみると、全体として優れた方向へと向かっているとは、断言されえない。この意味で、わたくしは、人間の狭義の価値および価値形成機構が定向的相対性をもつといわなければならない。

このことについては、われわれは、まず、狭義の価値および価値形成機構の優劣を判定するための基準またはこのための基礎を問題とするべきであろう。狭義の価値および価値形成機構が全体として優れた方向へ向かっているか否かをいうとき、そもそも、ここに優れているとはどのような状態であるかが問題となるからである。

これについては、われわれは、すでに、認識機構およびその機能としての認識の場合と異なり、価値形成機構およびその機能としての狭義の価値の形成については、対象観念に対する事実に対応するものが見出されえないことを述べた。われわれは、対象観念の、したがってその形成機構の、優劣判定のための基礎としての事実に対応するような、狭義の価値の、したがってその形成機構の、優劣の判定のための基礎を想定することができなかつたのである。

われわれにできることは、何らかの価値を自らの責任において選択し、これを前提とすることであった。そして、わたくしは、このような前提ないし価値前提を種としての人間のより良い生存に求め、この理由を示したのである。このような価値前提からすれば、われわれは、種としての人間のより良い生存への方向を優れた方向として考えることができるであろう。

だが、この方向からみる場合でさえ、われわれは、人間の狭義の価値および価値形成機構が全体として優れた方向へ向かっているということとはできない。その理由の一つは、そもそもいかなる方向へであれ、種としての人間の狭義の価値が、全体として軌道を決定されているとは、いえないところにある。

われわれは、人間の狭義の価値および価値形成機構の変化が、大きく偶然によって左右されるのであり、その方向が、全体としては、非決定的である、といわざるをえない。

第一に、人間の狭義の価値および価値形成機構は、全体として、人間を超えた何らかの不可知の力によって、予め、より優れたものへと向かうよう決定されているわけでは、おそらくない。その変化の方向は、人間という有機体種外部のさまざまな偶然の出来事、そして人間という有機体種内部の、さまざまな偶然の出来事によって、大きく左右されるのであるが、このような偶然の出来事が、こと細かに予め決定されているとは、わたくしには思われない。

第二に、人間の狭義の価値および価値形成機構は、人間によって、意識的ないし計画的に、全体として一定の方向へと向かわせられうるわけではない。もしも、人間の狭義の価値および価値形成機構を全体として何らかの方向に意識的に向かわせようとするのであれば、それは、特定の個人または集団の圧政によるしかないであろう。われわれは、人間の歴史において、一定の集団についてはあるが、このような圧政がなされたことを知っている。そこでは、たしかに、ある程度は、人間の狭義の価値が一定方向へと収斂されたのである。

だが、人間の狭義の価値は、全体として、計画的に一定方向に収斂され続けるわけではない。人間の狭義の価値および価値形成機構の変化は、そのうちに偶然の産物を含むのであり、これは、いかに明確な計画と厳密な統制とによっても、排除できるものではない。そして、この偶然の産物は、人間の計画を、遅かれ早かれ、破綻させるのである。

このことは、人間について、その狭義の価値および価値形成機構の変化に、意識が影響しないことを意味するものでは、もちろんない。むしろ、われわれは、人間の狭義の価値および価値形成機構の変化における意識の作用を、けっして看過してはならない。

意識を有する有機体種のなかには、外部的環境の変化としての外部的淘汰圧に対応して、狭義の価値を意識的に変化させるものがある。例えば、ある有機体種がそれまで主として依存していた食物が減少したとき、この有機体種の特定の個体が意識的に新しい食物を探し、このことによって、この有機体種が新しい食物を好むようになる場合が、それである。ここでは、それまで食物とさ

れておらず、したがって美味しいという狭義の価値が結びつけられていなかった何らかの対象についての対象観念に対して、意識の助けを借りて、新たに、狭義の価値が付与されるのである。このような狭義の価値の変化は、ときに、その有機体種の生存を可能とすることもある。

狭義の価値の変化は、意識が発達していない有機体種においては、無意識のうちになされるし、意識が発達している有機体種においても、無意識のうちになされうる。しかし、それは、意識が発達すればするほど、意識の作用をより多く受けることになるであろう。とりわけ、高度に意識が発達している有機体種としての人間については、意識によって、狭義の価値の変化が、自発的になされうることに注意されなければならない。人間は、例えば特定の食物の枯渇という外部的淘汰圧がなくとも、新しい食材を開発し、新しい料理法を発明し、これに狭義の価値を付与する。

外部的淘汰圧なしでのこのような狭義の価値の意識による変化は、その後、何らかの理由により特定の食料が枯渇するような事態が生じる場合には、結果的に生存に役立つことになりうる。しかし、それは、そもそも、この意味での生存のために意図されたわけではない。われわれは、その多くが、より良い生存を意図してなされたものである、ということ是可以する。そして、それは、何らかの緊急事態の発生によって、生存そのものに役立つこととなりうるのである。

だが、外部的淘汰圧なしでの狭義の価値の意識による変化は、より良い生存のためにのみなされるわけではない。われわれは、そこに、しばしば、これとは異なる要因ないし動因が存在することを看過してはならない。この動因は、狭義の価値の自己展開ともいべき事態のうちに見られるものである。それは、例えば、美味の追求といわれるものにもとづいており、一般的には好奇心といわれうるものにもとづいている。

好奇心は、狭義の価値の変化を引き起こす内発的な力である。それは、それ自体、意識的な力ではない。それは、むしろ、無意識のうちに湧き出る力であ

る。しかし、それは、意識をも引き起こし機能させる。それは、人間について、とりわけ顕著な力である。それは、内在的な狭義の価値の一つといえるかもしれない。それにしても、それは、よほど特殊な狭義の価値である。

外部的淘汰圧なしでの狭義の価値の意識的变化は、通常、それが生存のためにいかなる効果をもつかを意識することなしに行われる。それは、すでに述べたように、結果的に、生存に役立ちうる。だが、われわれは、それが、結果的に、生存にとって不利となりうることを認めなければならない。この後者の作用は、人間について、今日では看過できないものとなっている。それは、人間の将来について、われわれに差し迫った不安を抱かせるほどのものである。

だが、人間の狭義の価値の意識的变化がもちうる、人間の生存にとっての不利な作用は、その多くは事後的にであれ、いく分かは意識されうる。そして、それが意識されるとき、それに意識的に歯止めをかけ、またはそれを阻止する可能性が、部分的ではあれ、われわれに与えられる。このことが、人間の将来についての絶望からわれわれを救い、われわれに、かすかな希望を与えるのである。

4. 認識機構と価値形成機構の存在形態

わたくしは、広義の価値について、これを構成する二つの要素を見出し、これらが、いずれも、観念であると考えた。対象観念および狭義の価値が、これである。後者は、より正確には、狭義の価値観念とよばれるべきものであった。わたくしは、以上二つの観念によって構成される広義の価値が、やはり、一つの観念であることに注意しておかなければならない。

一つの観念としての広義の価値は、認識機構と価値形成機構との機能的関連によって生み出される。そこで、広義の価値の形成を問題とするとき、わたくしは、認識機構と価値形成機構との機能的関連のあり方を考察しなければならない。だが、その前に、わたくしは、ここで、このような機能的関連の前提と

なる認識機構および価値形成機構の存在形態について述べておくべきであろう。

わたくしは、これまで、対象観念と狭義の価値とを区別するだけでなく、これらのそれぞれを形成する機構として認識機構と価値形成機構とを区別した。そして、この二つの機構のそれぞれが、いくつかの要素的機構から構成される、と述べた。

このようなわたくしの論述は、認識機構と価値形成機構とが、さらには、これらの要素的機構が、明確に区別されうる別個の形態において存在するか、のような印象を与えるかもしれない。だが、それは、必ずしもそうではない。そして、わたくしは、そのように主張しようとしているわけでもない。このことを明らかにしておくことが、以下の課題である。

さて、わたくしは、われわれの認識機構が、われわれが自らのうちに有している認識装置のすべてを意味し、このうちには、生得的な解剖学的構造とその後天的変形、生得的な機能様式と後天的機能様式のすべてが含まれると述べた。また、わたくしは、同様に、われわれの価値形成機構が、われわれが自らのうちに有している価値形成装置のすべてを意味し、このうちには、生得的な解剖学的構造とその後天的変形、生得的な機能様式と後天的機能様式のすべてが含まれると述べた。

ここで、われわれは、以上にいう機能様式が、ある様式ないし型をもつ機能を形成する機構であって、この機構によって形成され、ある様式ないし型を示す機能そのものではないことに注意しておかなければならない。このことを明確に示すためには、わたくしは、前者を、機能様式形成機構とよぶこともできるであろう。だが、このようによぶとき、わたくしは、この機構と解剖学的構造としての機構との区別の問題に直面することとなる。

認識機構および価値形成機構についての解剖学的構造と機能様式との区別は、PopperのV構造とA構造との区別を意識したものである。わたくしは、Popperのこの区別を念頭に置きつつ、認識機構および価値形成機構として、解

剖学的構造だけでなく、いわば行動的構造が重要であることを述べようとしたのである。そして、わたくしは、また、とりわけこの行動的構造について、後天的に形成されるものが重要であるとも考えている¹⁾

認識機構および価値形成機構としての行動的構造と解剖学的構造との区別については、われわれは、つぎのことに注意しておかなければならない。それは、行動が解剖学的構造によって担われることから、行動的構造が、あたかも、後者の一部であるか、またはその単なる機能であるかのように見えるかもしれないことである。

行動の変化は、すべて、解剖学的構造がこれを可能とする場合にのみ生じる。この場合、われわれは、解剖学的構造を器官と同一視してはならない。それは、例えば、細胞によって構成される組織、細胞、さらには分子としてさえ、考えられなければならない。行動の変化は、このような解剖学的構造の何らかのものによってそれが担われうる場合にのみ生じるのである。このように、行動のすべてが、解剖学的構造によって担われ、したがって、特定の様式にしたがう行動も、解剖学的構造によって形成されるとき、われわれは、認識機構および価値形成機構として、それぞれ、解剖学的構造のみを理解すればよく、これと別個に、とくに行動的構造を理解する必要はない、と考えたくなるかもしれない。

だが、われわれは、単純に、このような考え方に与するわけにはいかない。われわれは、われわれの頭脳が、条件によって、さまざまな認識機能の型およびさまざまな価値形成の機能の型を示すことを知っている。このような機能の型の相違は、あたかも、頭脳という機械を運転する仕方によって生じるかのようである。それは、例えば、コンピューターのハードがソフトによって異なっ

1) 認識機構および価値形成機構のそれぞれを構成する行動的構造と解剖学的構造についても、われわれは、Popperの内部的淘汰の機構を考えることができるであろう。すなわち、 $V \rightarrow A$ (ここでは、行動的構造 \rightarrow 解剖学的構造) の式で示されるものが、これである。しかも、われわれは、ここで、 V について P と G とを区別し、 $P \rightarrow C$ の関係を見出しうるかもしれない。だが、このことの考察は、われわれの当面の課題ではない。

た様式をもつ機能を発揮するかのようである。行動的構造と解剖学的構造とは、それぞれ、この場合の運転の仕方ないしソフトと機械ないしハードにも相当する。

もっとも、この場合、ひとは、ソフトが、何らかの物体に具体化され、物体ないしハードとしてのコンピューターの一部を構成する、というかもしれない。このときには、われわれは、このように何らかの物体に具体化されたソフトをも含めたコンピューターという機械と、この機械に具体化されていない使い方とを区別し、前者が解剖学的構造に、後者が行動的構造に相当する、と考えてもいいであろう²⁾。

さらに、ひとは、ここで、機械に具体化されていない使い方を、機械の機能として理解しようとするかもしれない。だが、この機械の使い方は、機械そのもののうちに含まれその機能として発現するものではなく、機械と別個の存在によって、機械に作用するものであることが注意されなければならない。

このように考えるとき、われわれは、認識機構と価値形成機構について、解剖学的構造のみを理解するのでなく、これから区別される行動的構造をも理解することの、研究上の有用性をいうことができるであろう。行動的構造をもとりあげることは、もしも、それが構造の名に値する内容を有するものであるとき、われわれに豊かな研究成果をもたらさうからである。

だが、それだけではない。われわれは、行動的構造と解剖学的構造が区別されうるとすれば、認識機構と価値形成機構との変化は、まず、何よりも行動的構造に現れると思われることに注意しなければならない。このことは、機構の変化が行動的構造の変化のうちに明確であることを意味するのであり、機構の考察は、むしろ、行動的構造を中心としてなされるとき、より良い成果をもた

2) もっとも、このような考え方は、他方で、行動的構造と解剖学的構造との区別の困難を排除するものではない。解剖学的構造を器官としてでなく、組織、細胞、分子、さらにはこれを構成する要素において理解するとき、行動的構造の変化は、すべて、これを可能とする解剖学的構造の変化を伴っているかもしれない。このときには、われわれは、解剖学的構造と別個に行動的構造を考える根拠を失うかもしれない。

らしうることを意味するのである。

さて、生命がはじめて生成したころの有機体種については、認識機能と価値形成機能とは、おそらく、何らかの単純な傾向ともいふべき広義の価値を形成する機能として存在していたであろう。ここでは、二つの機能の分化は存在しないか、または少なくとも明確ではなかったにちがいない。そして、このような機能は、例えば、分子またはせいぜい一つまたは少数の細胞のような著しく単純な解剖学的構造によって担われていたであろう。この解剖学的構造においては、認識機構と価値形成機構との分化は存在しなかったかもしれない。

この場合、生命は学習なり (K. Lorenz)、または、生命は問題解決者なり (K. R. Popper) と考えるならば、われわれは、最も原始的な有機体種についてさえ、これが有機体すなわち生命であるといわれうるかぎり、その認識および価値形成を単なる物理化学的反応として理解するべきではない。われわれは、それらについて、後天的ないし経験的に形成される行動の型を理解し、さらに、この行動の型をもたらすものとして、後天的に形成される行動的構造としての機構の存在を想定しなければならない。この場合、このような有機体種にみられる行動の型は、おそらく、単純な広義の価値の形成機能の型ないし傾向形成機能の型として存在するにすぎず、そのうちに認識の型と価値形成の型との分化を示すものではなかったであろう。

このような傾向形成機能は、有機体が進化するにつれて、やがて、ある有機体種について、認識機能と価値形成機能とに分化し、そして、これによって、これらの機能を担う機構の分化が見出されることになったであろう。それは、Popper の考え方にしたがうならば、最初は行動的構造について、つぎに解剖学的構造について、生じたにちがいない。

これらの分化は、おそらく、意識の発生と発展とに一定の関連をもつであろう。有機体は、意識をもつことによって、自らに対する何らかの刺激とこれに対する自らの快・不快を意識するようになる。これは、対象観念と狭義の価値との意識の始まりである。

このような意識は、対象観念の形成という機能と狭義の価値の形成という機能、すなわち認識機能と価値形成機能とを分化させるものではないかもしれない。だが、それは、少なくとも、このような分化を促進させるものではあるだろう。なぜなら、意識は、それぞれの機能をいわば集中的に展開させるからである。そして、認識機能と価値形成機能とが分化するとき、この分化は、この二つの機能を担当する機構の分化をもたらさうであろう。この分化は、まず行動的構造の分化として現れ、これが解剖学的構造の分化を促すであろう。解剖学的構造の分化は、はじめは、例えば、分子または細胞内部のある部分の専門化として始まり、つぎに、いくつかの細胞の専門化をもたらし、やがては、それらの特定の場所への集中へ、そして、さらには、特定の形態をもつ器官の形成へと展開するかもしれない。

ここでわれわれが注意すべきことは、認識機能と価値形成機能との分化、そして、とりわけ、これらの機能を担う機構の分化が、一方において、その時々^々の外部的条件の変動と、他方において、内部的条件としての有機体の変異とによって、規定されることである。この二つの条件の変化の仕方は、大きく偶然によって左右されるのであり、したがって、これらの条件によって規定される、認識機能と価値形成機能との分化、そして認識機構と価値形成機構との分化も、大きく偶然によって左右されざるをえない。ここには、これらの分化のあり方について、発展の法則はない。すなわち、われわれは、これらの分化がどのような経過を辿り、どのような形態に向かうか、について一律にいうことはできないのである。

このことは、認識機能と価値形成機能との分化およびこれらの機能を担う機構の分化がおそらく最も進んでいると思われる人間についてもいえることである。人間についてみても、それらの分化は、いまだ完全でもなければ、終着点に到達したわけでもない。それは、また、完全に向かっているわけでもない。それは、偶然によって左右される進化の過程にある。

人間の認識機能と価値形成機能は、主として脳によって担われている。人間

の脳は、形態的にもかなり分化した器官であり、そのそれぞれの部分には、さまざまな機能が、少なくともある程度、対応している。人間の脳の部分におけるこの機能の分化は、これまでわれわれが扱ってきた認識機能と価値形成機能との分化と関連している。だが、この二つの分化は、けっして同一ではない。

人間の脳についての研究は、いまだ初歩的段階にあり、それについては、われわれには、そのほとんどがいまだ不分明である。しかし、それにもかかわらず、われわれは、ここで、人間の脳についてさえ、認識機構と価値形成機構との分化は、形態的には、必ずしも明確な形にはなっていない、ということができよう。

それだけではない。認識と価値形成とがとりわけ意識的かつ明確に区別されたのは、20世紀初頭、一人の天才 Max Weber によってであり、しかも、この区別は、これがなされてから100年近くが過ぎた現在においても、そして、また、これがなされた社会科学の分野においてさえ、多くの研究者によって理解されているとはいわれえない。このことを考えるならば、われわれは、人間の認識機構と価値形成機構との解剖学的構造における分化どころか、その行動的構造における分化も、さらには、認識機能と価値形成機能との分化さえも、まだ、未発達である、といわざるをえない。われわれは、これらの機能の分化が、かりに、人間について一般化するとしても、そのためには多大の時間を要し、ましてや、これらの機構が解剖学的に明確に分化するには、このことがかりに生じるとしても、さらに膨大な時間を必要とする、と考えなければならないであろう。

だが、現在のところ、認識機能と価値形成機能との分化が、ましてや、それぞれの機能を担当する機構の解剖学的分化が、このように不明確であるにもかかわらず、われわれは、二つの機能、そしてこれを担当する機構を区別して考えることを必要とする。その理由として、わたくしは、二つをあげることができよう。

第一の理由は、認識機能と価値形成機能とが異なる性質をもつ機能であり、

それゆえに、この二つを区別することによってのみ、われわれは、それぞれの機能を明らかにし、またその関連をも明らかにしうる、と思われるところにある。このような機能の解明は、また、これらの機能を担う機構の解明をも可能にするであろう。

このことは、認識機構と価値形成機構との分化のいかんにかかわらず、いえることである。

例えば、いま、認識機構と価値形成機構とが、解剖学的に、特定の器官を構成していないどころか、その場所さえ特化していない、有機体種がある、と仮定しよう。このような有機体種においても、例えば、認識機能と価値形成機能との間の時間的ずれは存在しうる。そして、この時間的ずれおよびこれをもたらす機構の解明は、認識機能と価値形成機能とを区別する場合にのみ、そもそも問題となりうる。さらに、また、このような有機体種についても、似而非の刺激に対する誤った行動、例えば、異なる対象種を同じ対象種として把握し(誤った対象観念の形成)、これを好ましいとして(誤った対象観念に対する狭義の価値の形成と付与)、これを求め、被害に会うこと、があるであろう。認識機能と価値形成機能の区別、さらにはこれらの機能を担う機構の区別の思考は、このような行動の解明を可能にし、または、少なくとも、この解明に新たな光を投げかける。

原始的有機体種についてみられうる以上のような事象は、もちろん、いわゆるより高等な動物種についても存在しうる。これらの動物種については、第一に、認識機能と価値形成機能との間の時間的ずれは、無意識的な二つの機能の間にのみならず、意識的なそれの間にも存在しうる。そして、意識的に認識と価値形成とがなされる場合には、人間についてしばしば見出されうるように、この二つの間の時間的ずれは著しくなることがある。

第二に、誤った対象観念の形成とこれに対する狭義の価値の形成と付与は、より高等な動物種については、まず、無意識的なそれとして存在しうる。さまざまな化学物質、例えばいわゆる環境ホルモンに対する生理的ないし身体的反

応は、その一つである。

つぎに、それは、部分的に意識的な、また低次に意識的な、それとしても、存在しうる。ホンソメワケベラに似て非なるベラに対するハタの反応は、おそらく、その一例である。

さらに、それは、人間の意識的な、とりわけ高度に意識的な、認識と価値形成としても存在しうる。真理の追求として特質づけられうる科学的認識も誤りうるものであり、にもかかわらず、人間は、この認識の成果としての誤った対象観念に狭義の価値を付与することがある。それだけではない。人間は、しばしば、価値形成機能に影響されて認識機能の誤謬を引き起こすことがある。

これらのことは、すべて、認識機能と価値形成機能、そしてこれらの機能を担う機構を区別する場合にのみ、その解明が可能となり、または、少なくとも、その解明に新しい光を投げかけられることになるものである。

第二の理由は、認識機能と価値形成機能との区別、そして認識機構と価値形成機構との区別が、とりわけ人間の進化について、その可能な方向を明らかにしようとするとき、有効な視点を与えるように思われるところにある。

科学的知識の多くが人間の生活に利用されている今日、それが企業を中心としてむしろ利用のために追求されて利用され、このことによって人間の生活に著しい影響を与えている今日においては、認識機能と価値形成機能との、そして認識機構と価値形成機構との区別は、人間の進化の可能な方向を考えると、とくに重要であると思われる。なぜなら、すでに述べたように、科学的知識も、これを利用のために追求してこれを利用する企業も、人間の認識機構と価値形成機構との機能の産物としての広義の価値の一つ、外在的価値、であり、また、企業による科学的知識の追求と利用とが人間の生活に与える影響とは、主として人間の認識と価値形成、とりわけこの結果の一つとしての内在的な広義の価値、に対する影響なのであるが、これらは、いずれも、認識機能と価値形成機能およびそれぞれの機構を区別することによって、より良く解明されうるからである。

このような解明は、われわれに、科学の、そしてとりわけ企業の、人間にとっての意味を明らかにするであろう。そして、このことによって、われわれは、人間の進化の方向を、いく分かでも、よりよい生存の方向に向かわせるための方法、または、少なくとも、人間の滅亡を防止するための若干の方法を見出しうるかもしれない。

5. おわりに

この論文において、わたくしは、企業と人間の進化の問題を考察するための基礎として、人間が形成する価値、なかでも、人間が形成しその心のうちに抱懐する価値としての $\dot{P}e$ 、をとりあげた。わたくしが、このように、まず、価値を、しかも、とりわけ内在的価値をとりあげた理由は、今日、人間にとって決定的淘汰圧ともいべき企業が、人間によってその外部に形成される外在的価値であり、この外在的価値が人間の内在的価値から発生・発展し、この意味で内在的価値にもとづいていること、それだけでなく、企業の人間の進化への影響が、主として、内在的価値に対するその影響として生じること、にある。

外在的価値としての企業と内在的価値とのこのような関係を、わたくしは、著しく単純化された形で、つぎのように示すことができる。

外在的価値、とりわけ企業を Pf

内在的価値を Pe とすれば、

$$Pf \leftrightarrow Pe \quad (1)$$

(1)式において、 Pe から Pf への矢印は、 Pf が Pe から生じることを示し、また、 Pf から Pe への矢印は、 Pe が Pf の影響を受けることを示す。

ここで、 Pe は、Popper の内部的淘汰についての式の選好構造を意味する。そ

こで、

技能構造を G
 解剖学的構造を A とすれば、
 Popper の内部的淘汰の式は

$$Pe \rightarrow G \rightarrow A \quad (2)$$

(1), (2)から

$$Pf \Leftrightarrow Pe \rightarrow G \rightarrow A \quad (3)$$

ここに(3)式は、 Pf が Pe から生じるとともに、 Pe に影響することにより、内部的淘汰の過程 $Pe \rightarrow G \rightarrow A$ に作用することを示す³⁾

さて、わたくしは、この論文におけるわたくしの考察を、以下のように要約することができるであろう。

わたくしは、人間の内在的価値が広義の価値であり、これは対象観念と狭義の価値とから構成されると考え、まず、対象観念について考察した。

わたくしは、対象観念が対象としての事実との交流ないし経験において認識機構によって形成される観念であること、人間の対象観念および認識機構は、①有機体種によって異なるものとしての種的特殊性、②集団および集団内位置によって異なるものとしての集団的特殊性、③個体によって異なるものとしての個体的特殊性をもつことを述べた。

ついで、わたくしは、以上のような特殊性をもつ人間の対象観念および認識

3) この場合、 Pf は Pe から生じるにもかかわらず、一度生じれば、独自の発展を遂げうるものであり、このことによって、 Pf は Pe に大きな影響を与えうるのである。

機構が、とりわけ、全体として、完全なものでないことはもちろんのこと、さまざまな有機体種のそのなかで最も優れたものでもなく、この意味で種的相対性をもつことを述べ、われわれは、そもそも、諸種の有機体の対象観念および認識機構の優劣を全体として判定する基準をもっていないこと、種のより良い生存もこのような基準ではないこと、このような全体的基準は、価値判断によって恣意的にのみ設定されざるをえないことを述べた。そして、わたくしは、さまざまな有機体種の対象観念および認識機構の優劣は、せいぜい、著しく限定された項目について特定の基準を設定する限りでのみいわれうることを明らかにした。

さらに、わたくしは、われわれが、さまざまな有機体種についてその対象観念および認識機構の優劣を全体として判定する基準を有しないことは、われわれが、また、人間の対象観念および認識機構が全体として優れたものへと発展しているとはいえ、ましてや、それが全体として完全なものへと発展しているとはいえないことをも意味しており、この意味で、人間の対象観念および認識機構が定向的相対性をもつことを述べた。

人間の対象観念および認識機構は、特定の個別的基準を仮定するとき、そのいくつかについては発展が、またいくつかのものについては衰退がみられる。とりわけ発展しているものの一つとして、われわれは、科学的能力をあげることができるのであるが、この能力の発展は、他方で、人間の直接的認識能力を衰退させ、このことによって、やがて、科学的能力、とりわけ科学を形成する能力、それ自体を衰退させうるのである。

つぎに、わたくしは、広義の価値のもう一つの構成要素としての狭義の価値について考察した。

わたくしは、狭義の価値も、対象としての事実との交流ないし経験において、価値形成機構によって形成される観念であること、だが、ここにいう経験は、対象観念形成の場合とは異なり、対象との直接的交流ではなく、対象観念を介する間接的交流であること、このことは、狭義の価値の形成が専ら観念の世界

における過程であることを示しており、狭義の価値の観念としての性質を一層明らかにすることを述べた。

わたくしは、また、狭義の価値の形成が、すでに形成されている対象観念に対する狭義の価値の形成としての価値判断と、対象観念の形成を前提とせずこれとは別に独自になされる狭義の価値の形成としての狭義における価値形成とを含むこと、このうちの後者が一つの創造の過程をなしうることを述べた。

さらに、わたくしは、狭義の価値および価値形成機構が、感覚および感覚機構とは異なること、感覚は対象観念またはその要素であり、感覚機構は認識機構またはその要素であること、狭義の価値については、何らかの感覚としての対象観念ないし感覚的对象観念に対応する狭義の価値としての感覚対応的狭義の価値と感覚ならぬ対象観念ないし非感覚的对象観念に対応する狭義の価値としての感覚非対応的狭義の価値とが区別されうることを述べた。

そして、わたくしは、感覚対応的狭義の価値の発展が感覚的对象観念の発展と関連して生じえ、それには、①特定の感覚種の内部での対象観念の発展に関連する内包的発展、②複数の感覚種の結合としての対象観念の発展に関連する外延的発展、そして特定種としての狭義の価値の発展としての、以上二つから区別される③新しい狭義の価値の発現ないし多様化の三つがあること、感覚非対応的狭義の価値の発展が非感覚的对象観念の発展と関連して生じ、これら二つの発展は、いずれも抽象の水準の高度化を意味することを述べ、ついで、狭義の価値の抽象水準の高度化は、例えば人間の利害という広義の価値についてみると、この狭義の価値について形成される対象観念に対するメタ狭義の価値としての位階の高度化を伴うようにみえること、だが、これは、利害を構成する狭義の価値の抽象性と一般妥当性との偶然の対応によるものであって、この狭義の価値の一般妥当性にこそ、メタ狭義の価値としての位階が対応すると思われること、を述べた。

さらに、わたくしは、人間の価値形成機構および狭義の価値も、①有機体種によって異なるものとしての種的特殊性、②集団および集団内の位置によって

異なるものとしての集団的特殊性、③個体によって異なるものとしての個体的特殊性をもつことを述べ、このような特殊性をもつ人間の価値形成機構および狭義の価値が、とりわけ、全体としてみると、さまざまな有機体種のそのなかで、最も優れているとも、ましてや、完全であるともいわれうるわけではなく、この意味で種的相対性をもつこと、を述べた。

その際、わたくしは、われわれが、認識機構および対象観念の場合と同様に、諸種の有機体の価値形成機構および狭義の価値の優劣を全体として判定する基準を有しないだけでなく、認識機構および対象観念の場合と異なり、価値形成機構および狭義の価値については、著しく限定された項目について特定の基準を仮定し、その優劣を判定することさえ、できないことを述べ、その理由として二つを示した。

その第一の理由は、すでに形成されている対象観念について狭義の価値が形成される通常の場合、諸種の有機体の価値形成は、①それぞれの有機体種の対象観念形成機能と、②これによって形成される対象観念の内容とによって異なり、そのため、さまざまな有機体種について認識機能から区別される価値形成機能の優劣を判定するためには、上記①および②が予め明らかにされるとともに、この二つに関して同様の有機体種が捜されねばならず、このことがさまざまな有機体種の価値形成機構および狭義の価値の優劣の判定を困難にすることになった。

そして、第二の理由は、認識の場合には、認識機構および対象観念の優劣を判定するための基礎として、対象としての所与なる事実を想定し、この想定にもとづいて、たとえ相対的ではあれ、対象に対する主体の働きかけの一部としての認識機構および対象観念の優劣を判定する基準を構成することが可能であるのに対し、価値形成の場合には、認識の場合の対象としての所与なる事実に対応するものを想定することができず、したがって、これにもとづいて価値形成機構および狭義の価値の優劣の判定基準を構成することができないことになった。対象としての所与なる事実であるかにみえる感覚的对象観念および純

粹論理的対象観念も、狭義の価値と同様に、対象ではなく、対象に対する主体の働きかけの一部であり、したがって、同じく主体の働きかけの一部としての狭義の価値の優劣を判定するための基礎とはなりえないのである。

この場合、わたくしは、狭義の価値の誤りを対象観念に対するその結び付き方の誤りとしてとらえ、この誤りを判定するための基礎は、これがあるとすれば、メタ狭義の価値のうちに求められざるをえないこと、いわゆる客観的価値の要素としての狭義の価値は、これを確かめることが不可能であるがゆえに、このような基礎とはなりえないこと、このような基礎としてのメタ狭義の価値は仮定されざるをえず、しかも、それは、①さまざまな種類の狭義の価値を評価しうるだけの一般性、②時間的にさまざまに変化する狭義の価値を評価しうるだけの通時性をもつものでなければならないことを述べ、わたくしが価値前提とするより良い生存という広義の価値の要素としての狭義の価値が、このような要件をかなりの程度満たしうるものであることを明らかにした。

さらに、わたくしは、人間が公的利害の要素としての狭義の価値を私的利害のそれより高位のものとして評価すること、この評価におけるメタ狭義の価値が種としての人間のより良い生存ないし福祉の要素としての狭義の価値に帰着すると思われること、認識と価値形成とを含む人間の行為のすべてが人間にとって意味をもつものであり、この意味は種としての人間の福祉の要素としての狭義の価値以外に考えられないことを述べ、このことが、わたくしに、この狭義の価値を、人間のさまざまな狭義の価値の優劣を判断するための基礎として措定させることを明らかにした。

そして、わたくしは、種としての人間の福祉の要素としての狭義の価値が、さまざまな狭義の価値の優劣を判断する基礎として曖昧であるということの例外が、種としての人間に害を与えるいくつかのものごとに対する好みという狭義の価値について見出されうること、種としての人間の福祉の要素としての狭義の価値の適用においては、この狭義の価値が集団としての人間の福祉および個体としての人間の福祉のそれぞれを構成する要素としての狭義の価値と矛盾

しうることから、慎重でなければならないことを述べた。

わたくしは、また、人間の狭義の価値および価値形成機構の優劣を判定する基礎が存在しないため、それらが優れた方向へと進化しているとはいえないこと、この意味でそれらが定向的相対性をもつことを述べ、種としての人間の福祉を価値前提として設定し、これを判断のための基礎として考える場合でさえ、人間の狭義の価値および価値形成機構の変化が偶然に左右されるがゆえに、それらが優れたものへと向かっているとはいえないこと、人間の意識は、それらを、一方でより優れたものへと向けさせうるが、他方で劣ったものへと向けさせうることを述べた。

最後に、わたくしは、認識機構と価値形成機構とが明確に区別される別個のものとして存在するわけではないことを、それぞれの機構について行動的構造と解剖学的構造とを区別して述べた。

わたくしは、生命が初めて生成したころの有機体については、認識機能と価値形成機能とが単純な傾向ともいふべき未分化の広義の価値の形成機能として単純かつ未分化の解剖学的構造によって担われていたと思われること、この場合、広義の価値の形成は、すでに、解剖学的構造の単なる反応ではなく、後天的な行動的構造をも含む価値形成機構によって形成されうる行動として理解されうること、このような広義の価値の形成機能は、やがて、ある有機体種について、部分的に認識機能と価値形成機能とに分化し、これが、最初は行動的構造において、つぎに解剖学的構造において、認識機構と価値形成機構との分化をもたらしたであろうこと、これらの分化は、その時々有機体外部および内部の条件の変化によって規定され偶然によって左右されるため、そのあり方について進化の法則は見出されえないであろうことを述べた。

そして認識機能およびその機構と価値形成機能およびその機構との分化は、人間についてさえ必ずしも明確ではないが、①認識機能と価値形成機能とは異なる性質を有しており、これらの性質は両者を区別して考察する場合にのみ明らかになりうるだけでなく、②認識機能と価値形成機能とを、そして認識機構

と価値形成機構とを区別して考察することが、人間の進化のありうる方向を明らかにするために有効な視点を与えられることを述べた。